

つながる

跡見学園高等学校 一年 中山 桜

曾祖母が亡くなった。今年の夏、母方の実家から訃報が届いた。私は東京に住んでいて曾祖母は香川に住んでいる。毎日毎日、顔を見たり逢えたりするわけではないが、年に数回の長期休暇には必ず帰省していた。去年は体調を崩す日も多くなり、何回か合間を見て病院に行き、曾祖母を見舞った。見舞いに行くと、眠っていて顔を見るだけの時もあったが、

「まあ、来てくれんたんやなあ。」

と、笑顔で迎えてくれた時もあった。そして必ず

「次は、夏休みやなあ。」

と、次に逢える長期休暇の予定をきちんと覚えていて、楽しみにしていることを話してくれる。そこに行くと、その場所に行くと、必ず曾祖母がいるものだ、いなくて当たり前なんだと私はずっと思っていた。

お葬式には、学校の行事もあり行けなかった。母と、お花を選んで、華やかな明るい、かわいいお花を送った。曾祖母の家から電話が鳴った。あれ？やっぱり亡くなってなんかいないんじゃない？と思ってドキドキして電話に出ると、伯父さんからのお礼の電話だった。夏休みに入り、皆で帰省した。曾祖母の家に行った。挨拶をして中に入っても、出て来ない。伯父さんだけが、出て来てくれた。どこかに買っている物でも行っているのかな、違う部屋にいるのかな。仏壇の前に行くと笑顔の写真と小さなお骨と、私の送ったお花があった。それでもまだ、どこかにいるのかと思っただけで、涙も出ない私はとても冷たい人間なんだろうか。感情がない、とてもダメダメな人間なんだろうか。色々な言葉が私の頭の中をぐるぐるまわった。伯父さんが、曾祖母が生前、周りの皆に、ひ孫が来るのを楽しみにしていること、来た時に何をしたら、こんなことを聞いた、と嬉しそうに話していたことを教えてくれた。だから葬式に来た人が皆、ひ孫の私の話をよくしていたなあど口々に話していたそうだった。

私が産まれて、曾祖母は沢山お世話をしてくれた。遊びに行く度に、洋服やおもちゃを買っておいてくれて、似合うといいなあ、喜ぶといいなあと思いつながら

でくれていたことが私はとても嬉しかった。黒豆を煮るのがとても上手で、最後にハチミツを入れるとお豆にツヤが出ることも教えてくれた。スカートの巻き方も、テレビで見たそうで教えてくれた。春は、桜の花と一緒に見に行った。近くにできなかった見晴らしの良い喫茶店に、急な階段があり登りづらいのに、連れて行ってくれた。ザリガニの捕まえ方も教えてくれた。近所のスーパーにある、コインゲームや、遊び場所に一緒に行って待っていてくれた。公園や湖に行って、曾祖母は乗り物に乗ったりできないけれど、優しく微笑みながら見守っていてくれた。今から思うと、もうその時の曾祖母は九十歳を優に超えていた。私は、曾祖母が歳を重ねて、目の前から消えてしまうだなんて考えたことすらなかった。しかし段々、遊びに行くと少し疲れているように見えたり、周りが「早めに帰ろうか」と気を使うようになり、私も曾祖母の年齢と体調が気になるようになった。そして、曾祖母はどうとう入院してしまった。それでも、何度かのヤマを乗り越え、生きたいという力が伝わってきた。私は、精一杯応援した。ずっとずっと欲しかったから。

私には、曾祖母の姿が見えなくなった。目に見えていた身体が見えなくなった。身体はどこに消えてしまったのだろうか。人間一人の身体はとても大きいのに。曾祖母は、この世からいなくなってしまったのに、毎日は何も変わらず流れている。ある日、母の夕飯作りを手伝っている時、黒豆を煮た。私が仕上げに、ハチミツを入れた。すると母が

「あら？どうして？」

と聞くので私は

「おばあちゃんが、お豆にツヤが出るからって教えてくれたんだあ。」

と話した。あ、そうか。人間の目に見える身体がなくなっても、こうしてつながっていった。ちゃんと、曾祖母はここにいるんだ。何だか、心強くなった。黒豆の煮物は、今は誰よりも曾祖母の手造りが美味しい。いつか、曾祖母の味に近付けるような煮物を作れるようになりたい。そして、又私が周りの人や、将来自分の子供や孫たちに伝えていけると、幸せなことだなと思えた。そして、つながる。つなげる。